

和歌山との縁

氏名：庄曉潤

所属：経済学研究科修士1年生 国籍：中国

17歳の時、私は重たいスーツケースを4つ引きずり、独りで留學生活の旅路に出た。当時は無知でありながらも夢にあふれていて、輝きを放つ、人の多い都会に強く憧れていた。そのため、日本の行先が東京や大阪のようなにぎやかな街であることを当然のように考えていた。しかし、現実には静かで温かい和歌山だったのである。

両親は、私が集中して語学を勉強できるように、和歌山にある日本語学校を選んだ。私は日本に来た日の夜のことを決して忘れることはない。飛行機が着陸したのは夜8時で、道はひっそりと静かで、何も音が聞こえなかった。そのような静けさが、私の和歌山に対する第一印象となった。和歌山で、真摯に勉強に打ち込む日がスタートした。一方では、生活はゆったりとしており、徐々にそのペースに慣れていった。

2年後、私は当初から憧れていた大阪にある大学に合格した。いよいよ夢だった大都会に住んでみると、ネオンの煌めきの陰には孤独が潜んでいるということに気づいた。いつも心に浮かぶのは日本語学校時代の思い出、和歌山の静かな通りと、確かな安らぎの感覚だった。

大阪での生活の中で、私はしばしば同じ日本語学校を卒業した友人たちと再会し、和歌山での数々の思い出を語り合った。たまに、私たちは共に懐かしい電車に乗り、1時間以上かけて、私たちの青春と初心を託した場所へと帰り、かつて教えてくれた先生に会いに行った。かつて住んでいた寮の周辺を散歩し、懐かしい通りを再び歩き、時には一緒にアルバイトをしていた店まで立ち寄った。和歌山はまるで自分の夢の始まりの場所であり、魂の居場所でもあると感じた。和歌山は自分のかけがえのない故郷で安らぎを与えてくれる存在なのだ。

何度も和歌山を訪れるうちに、私は徐々に気づいた。おそらく、自分が本当に求めているのは、華やかで賑やかな生活ではなく、ゆったりとした感覚と意義を感じられる生活なのだ。和歌山の静謐と落ち着きは、自分の内なる声を再び聞く機会を与え、自分自身と和解する道を教えてくれた。私は必死に走り続けるだけではなく、ゆっくりとした生活を大切にすることを学んだ。ここで、私に適した生活のリズムを再発見した。それは慌てることなく、しかし確固たる明確なリズムだ。

さらに私にとって重要なことは、和歌山で本質的な成長を遂げられたことだ。日本に来た当初は、無知で依存的で、生活の中で何度も躓いていた。しかし、この見知らぬ温かい小さな街で、電車の乗り方や、さまざまな手続きの処理、家賃や生活費の管理、生活上のさまざまな問題の解決などを独自に身につけた。初めて痛感したのは、成長とは一気に達成できるものではなく、日々の平凡な生活の中で、困難に立ち向かい、一人で責任を負い、粘り強く努力を続けることということだ。また、和歌山では異なる文化背景を持つ人々とのコミュニケーション方法を学び、傾聴、理解、寛容の大切さを実感し、自分なりの人間関係のネットワークを構築し始めた。そのようなゼロから一へと向かう過程は困難であり

ながら、非常に貴重な経験となった。和歌山が、私自身の語学力や学業基盤を築いただけでなく、性格や精神性を形成する重要な要素となった。それは頼りない子供だった自分を、自らの選択と責任を果たせる大人へと成長させてくれたのだ。

自分の本当の気持ちを理解した後、再び和歌山に戻り、和歌山大学大学院に進学すること



ことを決断した。多くの人が、機会に恵まれた大都会に残らない理由を私に尋ねる。自分はいつも微笑みながら答える。「懐かしい思い出があり、そしてこれからもたくさんの思い出を作りたいと強く願っているからです」と。和歌山は、留学生としての自分の能力を育んだだけでなく、自分の心の中の粘り強さと優しさを形成してくれた。ここで出会った友人たちは自分に勇気を与え、孤独でつまらないと思われがちな留学生生活を明るく彩ってくれた。おそらく、これら数多くの出来事が、最初の都会への憧れから、この小さな街への深い愛着に私の気持ちを変えてくれたのだろう。

和歌山を語るとき、単に山や海があることだけでは十分でない。三段壁の洞窟

の奥で、波の音に圧倒されたこと、とれとれ市場でマグロショーを見て興奮したこと、円月島で夕日が太平洋に沈む様子を見守ったこと、白良浜で友人たちと BBQ をしたり水遊びをしたりして笑い合ったこと、那智大社の 133 メートルの滝の前で大自然の雄大さを感じ取ったこと……。

現在の私は、新たな大学院生活の幕を開けようとしている。合格通知書を手にした瞬間、思わずつぶやいた。「私と和歌山は、本当に縁が深いんだ」と。もし皆さんがここまで読んでくれたなら、私の言葉を一度信じてみてほしい。この控え目でありながら魅力に溢れる場所、和歌山をぜひ訪れてみてほしい。このゆったりとした小さな街で、自身に属する安らぎと素晴らしさを私のように見つけることができるかもしれない。



和歌山结缘记

XiaoRun Zhuang

经济学研究科修士1年生 中国

17岁那年，我拖着四个沉甸甸的大行李箱，独自踏上了属于我的留学生涯。那是个懵懂又憧憬的年纪，渴望着灯火辉煌的人潮都市。我原以为起点会是东京、大阪那样的繁华，而不是一个安静、温暖却偏僻的小县城——和歌山。

为了让我能更专注地学习语言，父母替我选择了位于和歌山的语言学校。我永远不会忘记抵达那天的夜晚。飞机降落已是晚上八点，街上寂静无声。那份静谧，成了我对和歌山的第一印象。在和歌山，我开始了认真学习的日子，也逐渐习惯这里慢节奏的生活。两年后，我如愿考入了大阪的大学。然而真正住进梦想中的大都市后，我才意识到，霓虹背后也有孤独。回忆起那段语言学校时光，心里浮现的，是和歌山宁静的街道和那份踏实的安心。

在大阪的日子里，我常常和曾经一起从和歌山毕业的朋友相聚，聊起和歌山的种种回忆。我们会一起坐上那趟熟悉的电车，花一个多小时，回到那个承载着我们青春与初心的地方。和歌山仿佛是我梦开始的地方，也是我灵魂可以安放的地方，它给予我一种无可替代的归属感与安心感。

在一次次的旅途中，我渐渐明白：也许自己真正向往的，并不是灯红酒绿的热闹，而是那种能够让我感受到节奏与意义的生活。和歌山的安静与从容，让我重新听见了自己的内心，也让我学会了如何与自己和解。我不再总是急于奔跑，而是开始学会慢下来，认真生活。在这里，我重新找到了属于自己的人生节奏，一种不慌不忙、却坚定而清晰的节奏。

更重要的是，在和歌山的留学生活中，我真正体会到了成长的意义。初来日本时，我感到迷茫并依赖他人，但在这个温暖的小城中，我学会了独自搭电车、处理生活琐事、应对困难。成长并非一瞬间完成，而是在日常中逐渐学会承担与坚持。我也在这里学会了与不同文化背景的人相处。和歌山不仅提升了我的语言与学业能力，更深刻塑造了我的性格，使我从依赖的孩子成长为能够独立思考与选择的大人。

当我真正明白自己的内心，我决定再次回到和歌山，考进和歌山大学大学院继续深造。朋友问我为什么不留在大城市？我总笑着说，是因为回忆，还有想创造更多回忆的渴望。和歌山不仅塑造了我作为留学生的能力，也塑造了我内心的坚韧和温柔。这里的朋友给我勇气，让孤单的留学生活变得熠熠生辉。正是这些点滴，让我从最初对都市的向往，转变为对这座小城深深的眷恋。

如果要描绘和歌山，我不会只说它有山有海。我想说的是，那天我站在三段壁洞窟的深处，被海浪拍打岩石的声音震撼；是在圆月岛望着夕阳沉入太平洋时的宁静；是在白良滨和朋友BBQ、戏水时的欢笑；是在那智大社133米瀑布前感受到的大自然的磅礴。

现在的我，即将开始属于自己的幸福大学院生活。当我收到录取通知书的那一刻，忍不住轻声感叹：“我和和歌山，真的好有缘分啊。”如果你读到这里，不妨相信我一次，给这个低调却充满魅力的地方一个机会。来和歌山看看吧。或许你也能像我一样，在这座慢节奏的小城中，找到属于自己的一份安心与美好。